

第 12 回 災害科学国際研究所「災害と健康」学際研究推進セミナーを開催しました (2020/2/12)

テーマ：大規模災害の復興期におけるポジティブ要因に着目した自殺対策の実践
場所：東北大学医学部 6 号館（宮城県仙台市）

2月12日（水）に本学医学部6号館1階カンファレンス室にて、第12回「災害と健康」学際研究推進セミナー（主催：災害科学国際研究所「災害と健康」ユニット）を開催しました。今回は、仙台市精神保健福祉総合センターの大類真嗣先生をお招きして「大規模災害の復興期におけるポジティブ要因に着目した自殺対策の実践」と題して講演が行われました。当日は当研究所の災害医学研究部門 災害公衆衛生学分野の栗山進一教授が司会を務め、約30名の方々に参加いただきました。

ご講演の中で大類先生は、2016年ころの仮設住宅からの退去が始まって以降、自殺率の増加がみられていることを報告されました。震災直後には1年半ほどの間自殺率は低下し、その後増加に転じて震災後3年ほどで全国平均とほぼ同様となりました。その後1～2年は自殺率は全国平均とほぼ同様でしたが、2016年ころから増加に転じているとのことでした。

震災後の特にメンタルヘルスに関する支援は、中長期的に必要で、現在でもその必要性は衰えていない。すぐにさらなる対策とその実行が望まれるとお話されておられました。

ご講演には多くの質問が出て活発な討論がなされ、被災地での現在における課題が明確になりました。



会場の様子



大類先生

文責：栗山進一（災害と健康ユニット）